八王子南霊園
新八王子南霊園
ほうせんじほう
6号

薬王山 宝泉寺報

薬王山宝泉寺報
発行日：平成25年12月27日
発行者：薬王山宝泉寺
〒193-0944
東京都八王子市館町344
電話／FAX 042-661-3353
E-mail：info@housenji.net

檀信徒・霊園使用者各位に発行しています。

また一年があっという間に…

平成二十五年も早あと数日となりました。皆様にとってどんな一年だったでしょうか。幸不幸、様々な出来事があったと思いますが、どなた様も精一杯頑張った一年であったのではないでしょうか。

私が今年一年頑張ったことはなんだろう？と思い返してみました。法務事務、色々な研修など住職としての仕事はもちろん一生懸命やったつもりですが、実は年頭に目標にしていたことがありました。「一年間で出来るだけたくさん三拝をする」ということです。

三拝というのはいわゆる五体投地式の礼拝（お参り）の方法で、立礼の姿勢から両膝を折り、両肘、額を地に着け、さらに手のひらをお釈迦様のおみ足を戴くように耳の後ろに掲げます。このとても丁寧な礼拝方法を三回繰り返す、これを三拝と言います。

毎日の朝課（朝のお勤め）では、まずご本尊様に線香をお供えし、それから三拝します。今の季節、朝の本堂は冷え込んでいて、眠気も一発で吹き飛びます。張り詰めた空気の中でする三拝は、気持ちが良いものです。朝課以外にも、授戒会の時には3日間で三百回以上三拝をしましたし、各地のお寺へ訪問したときのご挨拶や、請われて法話をする時など、三拝が作法になっています。色々な場面で深々と三拝するとき、いつでも自然と、謙虚な気持ちがわき上がってきます。また神仏と共に生きることをしみじみとありがたく感じることが出来ます。私にとって、とても大事な時間です。

正受庵　冬は７ｍの積雪がある

数えてみたら、本年は約七百七十度、三拝をする機会に恵まれました。礼拝の回数にするとおおよそ二千三百回。来年は数と共に、もっともっと丁寧に心を込めた三拝をすることを目標にしたいと思います。

新しい「檀信徒世話人」誕生

八月の寺役員改選に伴い、世話人役員会に新しいメンバーが加わりました。利根川浩一氏、長崎健氏、若杉一徳氏の三人です。全員アラフォー。住職と同年代の三人です。総代の澤田和久氏、山口吉文氏、澤田昌三、守屋清氏の諸先輩方、そして住職、閑栖と共に、これからの宝泉寺の舵取りを担っていただきます。
よろしくお願いいたします！！

世話人役員会と住職、閑栖

法話

法事や施餓鬼会の時にお読みする「白隠禅師坐禅和讃」というお経があります。正確にはお経ではなく、経典に書かれた釈尊の御教えをわかりやすく解説し、調子をつけて歌い上げた「和讃」とよばれるもので、江戸時代に白隠慧鶴禅師によって書かれました。

白隠禅師は一六八五年、駿河の国原宿に生まれました。「神機独妙禅師年譜」などによれば、幼名を岩次郎、一五歳にして近隣の松蔭寺で出家し、その英機優れたことを発揮、各地を行脚して修業を重ねました。二十四歳の時、越後高田の英巌寺に坐禅していたおり、寺の鐘の音を聞いたとたん、豁然として大悟、「三百年の間私ほど痛快に悟った者はいない！」と大変な自信を得るに至りました。しかし白隠のあまりの自信家ぶりを心配した兄弟子に伴われて、現在の長野県飯山に正受老人を訪ねたとき、「役にたたない死に坊主め！」とこてんぱんにその自信を打ち砕かれてしまいます。正受庵という庵に住むこのご老人は実は道鏡慧端禅師という当代随一の禅僧で、才能がありながら未熟な悟りに満足している白隠をひたすら厳しく鍛え直したのでした。新たに生まれ変わった白隠は、やがて故郷松蔭寺の住職となり、坐禅和讃のような自在な詩偈や画賛をもって大衆を教化し、同時に衰退していた臨済禅を根本から立て直す大活躍を見せるのです。現在、日本の臨済宗はすべて白隠が作り上げた「公案禅」を元にしており、後に「駿河には過ぎたる物が二つあり　富士の御山と原の白隠」と狂歌された大禅匠となるのです。我々現代の臨済僧にとって、白隠、正受老人のお二人は紛れもないお師匠さまなのです。

白隠画賛　観音図

白隠慧鶴像　眼光鋭く厳しい表情をしている

先日、白隠鍛え直しの舞台となった正受庵に行ってきました。当時のままの本堂や坐禅堂を参拝して、その質素なたたずまいに圧倒されました。本堂はわずか八畳あまり、囲炉裏と竈があるのみで、ガラス戸さえありません。檀家のないこの寺を護るために、当代ご住職は毎日托鉢をして糧を得ておられるとのこと。修行道場そのままの生活をしっかり続け、この大事な禅跡を護っておられるのです。清廉なご住職の前に、普段の自分の様子が恥ずかしく思われると共に、修業三昧の生活を少しうらやましくも感じたりするのです。

正受老人　道鏡慧端禅師像

さて「坐禅和讃」の一行目、中段の一行そして最後の一行を抜き出すと次のようになります。

「衆生本来仏なり」
「直に自性を証すれば」
「この身即ち仏なり」

生きとし生けるものは皆、本来仏と同じ性質を持っている。自分自身の尊さに気づくことが出来れば、その時にはもう仏と同じ命を生きているのだ。

お釈迦様は悟りをひらいた瞬間、「なんと素晴らしいことだ、今まで修業をして悟りを得るものと思っていたがそれは間違いだった。元々誰しも心の中に如来と同じ智慧と徳相もっていたのだ。ただ妄想・執着の心が自分自身の尊さを見失わせていたのだった」と仰いました。

白隠はこの言葉こそ、お釈迦様の第一等の悟りの言葉と捉えました。先にご紹介した坐禅和讃の三つの言葉は、当にその事を指しているのです。

性善説性悪説という言い方がありますが、本来仏教はどちらでもありません。人間は良いこともすれば悪いこともする。芥川龍之介の小説「蜘蛛の糸」で主人公は地獄に落とされた盗賊で在りながら一匹の蜘蛛を助けたことでお釈迦様に救いの手をさしのべられます。「悪行も善行も同じ人間がする。なぜなら欲や妄想、執着という愚かさのためだ」善を行う心を如来、悪行を犯す心を修羅とするならば、如来と修羅とが同居して、その時々に顔を出すのが私たち人間の普段の心の有り様なのかもしれません。そこで白隠は優しく言うのです。「愚かな自分の心を素直に見つめてごらん。（直に自性を証すれば）そうすれば自ずと自分の中の尊い命に気づくことが出来るんだよ（この身即ち仏なり）」

先般お配りした「宝泉寺檀信徒日課経典」にも「白隠禅師坐禅和讃」を掲載しています。一度ゆっくり読んでみると面白いですよ。まだお持ちでない方は、お問い合わせください。

隠画賛　達磨図
直指人心見性成仏

コラム

仏事に関するよもやまばなし

釈尊のご葬儀、っていったどんなだったんだろうと思って調べてみました。釈尊は四十五年間伝道の旅を続け、亡くなるときにはお弟子さんはすでに六千人もいた、言われています。釈尊のお亡くなりになる場面は「大般涅槃経」に出てきますが、この中で「私の遺体の供養に関わってはならない」と釈尊自身が言ったと書かれています。ちなみにこの一文から、「本来坊さんは葬儀をするべきではない」という意見をいろんな本の中などで散見しますが、私はそれはちょっと早計に過ぎると思っています。駒澤大学長の奈良康明先生（曹洞宗僧侶）は詳細な経典研究から「釈尊は遺体処理（火葬）に関わるなといっているのであって葬儀自体するなと言っているわけではない」と結論されていますし、この「大般涅槃経」をもう少し読んでいくと「転輪聖王の葬送にならえ」という葬儀方法に関するご自身の指示や、実際に葬儀荼毘に、高弟が参列している記述が出てきます。とても「葬儀に関わるな」と仰ったようには思えません。

考えてみれば、当時、釈尊のような偉大な人物に対する決まった葬送方法があったはずもなく、と言うことは王族や有力武将を含めた六千人の弟子達が、こぞってやたらめったら盛大な葬儀をしようとするのは目に見えています。死期を悟った釈尊は、自分の葬儀をめぐって大混乱が起きるのを見越しておられたのでしょう、ご自身が王族出身であることから「伝統的な王族の葬儀方法（の葬送）でやりなさい、それ以上のことはするなよ」「一番大事なのは私の葬儀ではなく修業なのだから、弟子達はいつまでも悲しみ騒ぐんじゃないよ」と遺言されているのです。決して坊さんは葬儀をするなとか、葬儀は人任せにしておけ、などという意味ではないのです。むしろ、「華美にすぎず、簡素にすぎず、当たり前のやり方をして、それからの自身の生活を大事にせよ」という、自身亡き後残された者を気遣う、やさしく思慮に富んだお言葉であるのです。

先日、歌手島倉千代子さんのご葬儀が行われ、テレビでもその映像が沢山流れていましたね。「こんな人がお焼香に!!」とワイドショーの野次馬根性は変わらないなあ、と思いつつ、ちょっと映った祭壇の様子に、おやっとおもいました。美しく飾られたみごとな花祭壇でしたが、飾られているのは以前叙勲された勲章があるだけで、大きさもそれほどではない。国民的大歌手にしては、シンプルなもんだなあ、と感じたからです。

実は、島倉さんは生前から、ご自身のお葬式の飾り方や、費用のこと、お墓のことなどすっかり事前に相談してあったそうです。納骨や法要の手はずまで整えた、その相談した先（つまり菩提寺）が臨済宗のお寺で、私の知り合いのお寺さんだったのです。お戒名も新聞で見たときは正直ちょっと変わった戒名だなあ、思っていたのですが、この菩提寺さんに聞いたら「ずいぶん前に二人で（住職と島倉さん）で相談して決めたんだよ。本人が気に入るようにつくってあげたんだけどね」というお話しでした。ならヨカッタ。

きっと事前にお寺との相談がなかったら、所属事務所やレコード会社、ファンクラブやら、友人知人が入り乱れ、大変な騒ぎになると思われたのでしょう。波乱に満ちた人生だったからこそ、最後は自分で責任を持ちたい、そんな思いだったのかもしれません。華美にすぎず簡素にすぎず、参列するお客のことまでよく考えられた葬儀式だったと、菩提寺さんは仰っていました。普通、喪主や家族が、葬儀の手はずは整えるところですが、残念ながら島倉さんはあまり家族に恵まれなかったようで、ご本人がすべて事前にお決めになって、あとで問題ないように、費用もぜんぶ納めてあった、と言うことです。

お葬式で一番大事なことは、故人ときちんとお別れをすること。故人の命を己の命として、しっかりと受け継ぐことです。それが分かっていたら、必要以上に豪華な飾りも要らないし、かといって花を手向けるヒマも無い「直葬（火葬だけの葬送）」では、具合が悪いのです。相応の葬儀、いわゆる普通のお葬式が一番良いんです。死という別れを避けることは出来ません。またその悲しみも取り除くことが出来ません。だからこそ、私たちは、きちんと葬儀をして愛する人の辛い死を受け入れる準備をし、心の整理の端緒とするのです。そして死にゆく本人である釈尊も島倉さんも、後に残った人たちが死の悲しみに何時までもこだわらないように、という優しさを忘れませんでした。見事な去り際というべきではないでしょうか。

事前の相談には「葬儀相談窓口」もうけている葬儀屋さんや互助会組織などもありますが、実際はほとんどその業者にお任せになってなってしまいます。費用に関して言えば、先日とある業者の施工した葬儀式請求書を後で見る機会がありました。これがびっくりするほど高額。そこで信頼する別の業者さんに「鑑定」してもらったら、本来料金のかからない物や最初からずいぶん高い設定がされている物など、不審な物が沢山ありました。たとえ相見積もりを取ったとしても、必要不必要、サービスの有無など、聞きかじった程度の素人（親戚のおじさんによくいますね）には絶対分からない。葬儀の時にはだいたいみんな慌てていますから、よく分からないまま契約して、結局無駄な出費をせざるを得ないことになってしまう。

幸い皆さんには、宝泉寺という相談場所があります。仏事葬儀の専門家たるお寺と、信頼できる葬儀施行業者と、御葬家とが一体になって大事な葬儀を進めていく、それが現代では一番いい方法だと思うのです。メールでもお電話でも結構です。ご不幸事と避ける意識は分かりますが、分からないことや迷うこと、それに自分のこと。いつでも思いついたときに、一度お声を掛けてください。親戚のおじさんに相談するより絶対イイですから。

{き} あいうえお用語辞典

経典（きょうてん）

なぜお経は日本語に訳さないのか。①ちょっと前の時代まで漢文の読み書きが出来る人が多かったから②訳をすことでだんだん意味が変わっていってしまうから③現代語にすると意味の解釈だけして自分で考えようとしなくなるから。正解は、全部。禅はお釈迦さまの「御心」を嗣ぐ「仏心宗」。言葉の意味を学ぶのも大事だけれど、文字はあくまで仏法の入口の案内書き。大事なのは、自分で考え自分で感じて、お釈迦様の「御心」を追体験すること。迷ったら案内板を見て確かめる、それがお経の本当の使い道。作家や学者が訳した「現代語訳般若心経」なんか読んで満足しているようじゃ、レストランの看板だけみて食べた気になるのとおんなじですよ。看板の（経典）の読み方はいつでもレクチャーいたします。

霊園管理事務所から 霊園だより

今年もあとわずかとなって参りましたが皆様いかがお過ごしでしょうか。この年末年始とも管理事務所ではお花お線香をご用意して皆様をお待ちしておりますのでぜひご利用ください。また、本堂用のお花や墓前用の大きなお花なども事前にお申し付け頂ければご用意いたします。寒さ厳しき折から。お体にはお気をつけてお過ごしください。

八王子南霊園
管理事務所　畑山

編集後記

今年もアチコチでいろんな経験、勉強をさせてもらいました。しかし、しっかり身についているのかと言われると、全部が全部はなかなか・・・食べたものはしっかり身につくんですけどねえ・・・

年の瀬は忙しく過ごされると思いますが、食べ過ぎ飲み過ぎには気をつけて、どうか檀信徒各位には、良いお年をお迎えください。

宝泉寺　042（661）3353　ホームページ：http://www.housenji.net/　E-mail：info@housenji.net